

## シダネルとマルタン展 最後の印象派 色彩の詩情・光の神秘

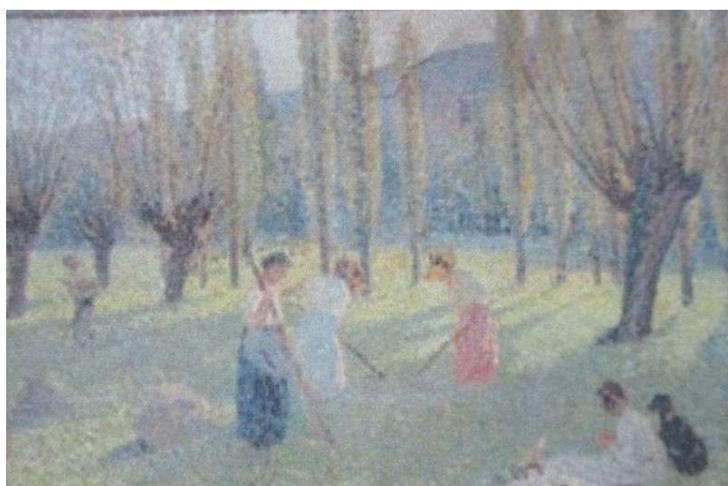
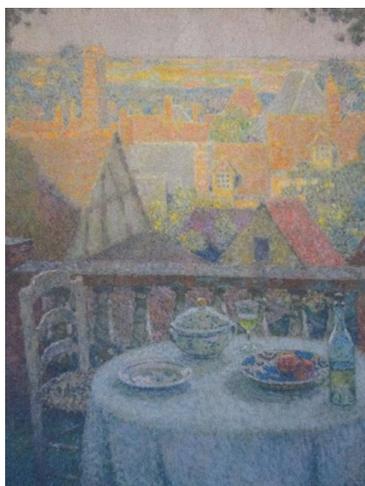
SOMPO 美術館（西新宿） 2022. 03. 26～06. 26

「アンリ・ル・シダネル」(1862～1939) は、インド洋・モーリシャス島出身で、パリに出かけ印象派や新印象派に影響を受けながら、写実主義、象徴主義の作風を取り入れて、独自のスタイルを確立し、フランス北部の町ジュールブロワを愛し、ブリュージュやヴェネツィアなどの古都風景にも魅せられた。

「アンリ・マルタン」(1860～1943) は、フランス生まれパリで美術を学んだ後にイタリアへ留学、帰国して光の表現や神秘的効果を生み出すために新印象派の点描技法を取り入れる。1890年代は、象徴主義の画家として注目されるが20世紀に入ると日常風景や建築物を多くモチーフにするようになった。

二人の画家は「最後の印象派」と称される世代の中心的存在で、印象派を継承しつつ、新印象主義や象徴主義など同時代の表現技法を取り入れて独自の画風を確立し、幻想的な主題、牧歌的な風景、そして身近な人々や生活の情景を親密な雰囲気を描きだしている。

本展は、この二人の画家に焦点を当てて、世紀末からモダニズム（現代風の趣味や流行を追う傾向）に至るベル・エポック期に、穏やかで神秘的な光の表現を追求した足跡を「およそ70点」の油彩・素描・版画作品で辿っている。



アンリ・ル・シダネル 《ジュールブロワ テラスの食卓》 1930年 左

アンリ・マルタン 《二番草》 1910年 右

他に

シダネル 《エタプル、砂地の上》1888年、《サン＝トロペ、税関》1928年

マルタン 《カプリエルと無花果の木》1911年、《麦わら帽子の男》1913年頃  
などの作品が展示されている。